

榊原英資著「ドル漂流ードル、ユーロ、円、人民元はどうなるのかー」

朝日新聞出版 2010 年 5 月 30 日刊を読む

1. 円が強くなるとは

- (1) 円が強くなるということは、いわば、日本が強くなるということです。そして、現在、緩やかに円高になっていることを、それほど、気にすることはないのではないのでしょうか。日本では円高は輸出減少の懸念からしばしば株安に結びつきますが、自国の通貨が強くなることは、本来、株価の上昇につながるべきことではないのでしょうか。
- (2) 輸出企業にしても、少なくとも、間接的には原材料を輸入しているわけですから、円高はマイナスばかりではないはずです。天然資源が乏しい日本にとって、やはり、「強い円は日本の国益」なのではないのでしょうか。

2. 英語の重要性

- (1) 最近中国に行って強く意識させられるのは、アメリカ留学組、いわゆる海亀派が次第に政府や民間の要職につき始めたことです。英語教育も大変強化されています。中国のナンバーワンの大学である精華大学では授業の 20 %が英語で行われ、それを 50 %まで引き上げようという努力がなされています。精華大学でも北京大学でも多くの学生たちがアメリカやイギリスへの留学を望んでいます。今や、英語はアメリカやイギリスの言語というよりはアジアを含めた世界の共通語になってきたのです。
- (2) この点で、日本人全体の英語能力が劣っていることに筆者は強い懸念を感じています。英語をマスターしなければ、アメリカやヨーロッパだけではなくアジアとのコミュニケーションにも支障が生じるからです。筆者もよく北京・上海・ソウル等を訪れますが、コミュニケーションはほとんどの場合英語です。中国や韓国の知識人たちの英語能力は急速に向上しているのです。
- (3) 英語はたしかに世界の共通語になってきているのですが、米ドルは、むしろ、逆の方向に向かってきています。つまり、基軸通貨としての力の弱体化です。アジアでは、まだまだ、米ドルが重要なのは確かですが、次第にアジア通貨が相対的に強くなり、米ドルの保有意欲は減少しています。まだまだ決済通貨としては広く米ドルが使われていますが、一部では中国の人民元等が使われ始めました。
- (4) 円の国際化はかなり前から日本では意識されていたのですが、これはあまり進んでいません。東京がアジアの中心的金融市場になれないことも、円の国際化が進まない原因の一つでしょう。東京マーケットの国際化が進まない最大の原因は英語ノンフラ(社会基盤)の弱さです。香港でもシンガポールでも、英語が共通言語です。特に金融の世界では英語が支配的です。東京だけが英語が弱いということでは、東京が香港やシンガポールに対抗することは不可能です。
- (5) 中国は将来、上海を国際金融センターとして育てようとしています。当然、使用言語は中国語ではなく英語です。円の国際化は日本や東京市場の国際化が進まなければ実現不可能です。残念ですが、このままでは、円ではなく先に人民元が国際化してしまう可能性の方が高いかもしれ

ません。アメリカやイギリスの金融機関がアジアで強いのは、歴史的背景もありますが、一つはこの英語のインフラの強さにあるのでしょう。

(6) いずれにせよ、アジアではしばらくは共通通貨化は進まず、円、人民元、あるいは韓国ウォンやタイ・バーツが並立していくことになりそうです。対ドル、そして、おそらく対ユーロでもこうした通貨の価値は上昇していくことになります。世界経済のなかでいわゆるリオリエント現象が進み、次第にアジアに経済の重心が移ってきているのですから、当然といえば当然ですが、通貨の面ではリオリエント現象は、今のところ、あまり意識されていないようです。

(7) アジアの通貨が対ドル・対ユーロで強くなるということは、アジア共通通貨ができなくても、徐々にドルやユーロの保有や決済から、アジア通貨のそれに移ってくるということを意味します。ドル・ユーロ・アジア共通通貨という世界はまだまだ先のことでしょうが、ドル・ユーロと複数のアジア通貨の併存という世界に次第に世界は入ってきているようです。

(8) ドルという基軸通貨を中心に動いてきた世界の為替が次第に無極化のフェーズ(局面)に入ってきているのです。無極化はブロック化の結果ではありませんが、ある意味での、混乱の結果であるかもしれません。ドル中心の世界から無極化の世界へ。あるいは、緩やかなリオリエント現象を背景とする世界経済の分散化と混乱。いずれにせよ私たちは今まで経験しなかった歴史の転換点に入ってきたのでしょう。イギリスの時代から混乱期を経てアメリカの時代に入った世界経済は 21 世紀に入って 10 年、再び混乱の時代に入ってきたのでしょう。

(9) いや、混乱を避ける手立ては色々あるかもしれません。G20(主要 20 カ国)をはじめ、様々な国際協調のメカニズムが健在で、むしろ強化されているからです。しかし、混乱ではないにしても、無極化であることは確かでしょう。アメリカ中心の一極体制から無極化の時代へ入り、為替もまた、ドル中心から極のない局面に移ってきたのです。

P209 ~ 212

[コメント]

円がどこまで高くなっても、強い円は国益と言えるのか。言えるとするならば、超円高を国家戦略としてどのように活用すればよいのか。そのとき、ドルやユーロ、元をどのように考えればよいのか。自国通貨高は、輸出主導型産業にとっては壊滅的打撃を与え、そこで働く人々の大量の失業を生むことは、国際経済学の教科書にも載っているほど当たり前のことだ。ではどうすればよいのか。どんな場面でも自らの専門領域で強みにさらに磨きをかけることと、IT 化、それに「英語」は欠かせないようだ。日本や自らを考えさせる良書。

— 2010 年 7 月 11 日 林 明夫記 —